

序 章

第1節 研究の動機と研究主題設定の目的

私は4年前、現在の勤務校である上里中学校に赴任した。社会科の教員として採用されて10年目のことであった。上里町は私が生まれ育った、まさに地元である。長く住んできた愛着のある地元ではあるが、生活には全く不自由なく、大きな災害もなく、快適に暮らしていけるが取り立てて特徴のない小さな田舎の地方都市という程度の印象しか持っていなかった。しかし昔とは私自身の人生の段階も変わり、いち生活者・主権者として生活し、また教員として生徒に対して向き合っていく中で、自分が住む町はどうすればもっとよくなっていくのだろうか、という思いを少なからず持つようになった。そのために私自身ももっと自分の住む地域のことを知らなければならぬ、そしてこれからこの町で生きていくであろう生徒たちにも、もっと地域のことに関心をもってほしい、と考えるようになった。

社会科をとりまく動向を見ても、現行の学習指導要領で「社会への参画」が大きく取り上げられ、各地で数多くの研究や実践がなされてきた。社会科の教科としての目標は、かつてより一貫して「社会の形成者に必要な公民としての資質」であり、世の中にどのように目を向け、自分がそこに関わっていくことができるか、ということが新しい学習指導要領が全面実施となる今後、さらに重要となっていくと考えられる。さらに、新しい学習指導要領では、「深い学び」の鍵として「見方・考え方を働かせる」ということが、今まで以上に重要視されることとなった。働かせるためにどのような「見方・考え方」の持たせ方、鍛え方が必要なのか。それを具体化し、生徒に段階的に力をつけていくことが課題となっている。

これらのことから、「社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」を育み、絶えず変化していく世の中に関わりを持ちながら社会の一員として活躍していくために、私が現段階で生徒にとって重要であると考えたのが、「自らの身近な地域に目を向ける」ということである。地域への目を見開いて、何気なく見過ごしてきた特色や課題、先人の歩みに気が付き、自分なりに考える経験を積んでいくことで、地域への愛着、疑問、問題意識などが育ち、それらを土台として、さらに広い世の中や世界へ「見方・考え方」を働かせて自分の関わりを広げていけるのだと考える。社会への参画意識の高まりは、自分の地域への視点なくしてありえない。逆に、自分の地域への愛着や開かれた目を持って、確かな「見方・考え方」を働かせて学習を深めていくことができれば、社会への参画意識につながっていくだろう。

「地域社会への参画意識を育てる地域教材の開発」という本研究のおもな手段は、私が抱いたこれらの課題意識とともに、生まれ育った上里町が勤務地であるという現在のタイミングで、どのように生徒の「見方・考え方」を鍛えて働かせ、社会への参画意識を育てていくかと考える中で定まったものである。すぐれた教材には、生徒の主体的な取り組みにより「見方・考え方」を十分に発揮させ、問いを生み出し、思考や構想を推進する力がある。さらに、その優れた教材が自分の身近なもの、学習内容を身近に感じさせてくれるものであれば、より意欲を高め、学習活動を通じて地域に対する理解、愛着、課題意識を高めていくことにつながると考える。

本研究において、まだ社会科での学習内容として発掘されていない地域の魅力や特色、課題などの素材を掘り起こし、それを「見方・考え方」を働かせる価値のある教材として形にし、今後の上里の社会科に生かせる形にしていきたい。以上が本研究の動機と、主題を設定した理由である。

第2節 研究の手立て

① 本研究では、様々な側面から私自身が地域を知ることが出発点となる。よって、多様な文献調査と現地取材、フィールドワークにより実物や具体的な資料に多く触れることを第一とする。文献調査では、研修先である埼玉県立文書館にある書籍、県史、市町村史や古文書、行政文書などを広く求めるとともに、文書館地図センターにて保管・公開されている各種地図、河川や道路の台帳、書籍を中心に活用する。また、明治期から存在する町内各小学校への取材、町の郷土資料館、図書館、群馬の図書館や文書館などでも文献・資料の調査を行う。

フィールドワークでは町内の史跡、寺社、河川にかかわる施設、微地形の現地調査などを、文献や地図と比較しながら行う。また必要に応じ、防災・水害や水運・交通、歴史的背景など、上里町と共通の課題や関連する事例を持つ他地域や他県の施設、史跡などにも足を運ぶ。また、各地で行われる研究大会や学会等への参加に際し、可能な限り現地調査を実施する。

② 文献やフィールドワークで収集した素材をもとに教材化を進める。単元の核となりうる地域素材を中心に、動機付けや学習内容を身近にするような単発の素材も順次教材化を進めていく。さらに、新しい学習指導要領を読み込み、地域教材の活用について触れられた内容を表にして表す。そこに教材化された、また今後教材化される可能性のある地域の素材を、分野・内容ごとに整理・分類し、活用可能な単元や内容ごとに位置付けてリスト化する。地理的分野に関わる内容に限らず、歴史的分野、公民的分野で活用可能な素材についても分類、整理する。

③ GISの活用方法を中心に、教材の作成・提示方法の研究を深める。地理院地図等をはじめとした、誰でも自由に活用できる高機能なGISが広がっているが、まだまだ教員の世界に一般的なものとして浸透しているとは言えない。身近な地域の情報を視覚的にわかりやすく表せること、これまでは入手が難しかった地域の主題図や統計データがビッグデータの活用によって容易に教材化できること、その他多くのメリットを生かして、地域への理解を深め、「見方・考え方」を働かせることを促す教材を生み出す。併せて後述する検証授業の中で、生徒に簡単なGISの活用技能を身に付けさせることによって、生徒の資料収集の技能を高め、選択肢を増やすことを目指す。

④ 上記の研究成果や教材化の成果をもとに、所属校で検証授業を行い、生徒の反応や学びの様子、授業後の変容などを分析し、「見方・考え方」の深まりや、地域への理解、参画する意識の高まりなどを検証し、教材や授業の再構成を行う。その方策として、授業での成果が図れる作品やまとめの作成および、研究開始時と検証授業終了後に生徒へのアンケート調査を実施する。

以上のような方法で研究を進め、最後に研究全体の成果と課題をまとめる。

なお、本研究では、授業に生かすという観点から資料収集や取材、分析を行うことが主眼であり、地域の特色や課題の解明や究明を目的としたものではない。よって、文献資料や現地調査の分析や整理、考察等も学術的な視点というよりは授業実践からの視点を中心とする。